

# リフレクションに着目した プレゼンテーション教育手法

—8つの教育のタイプ—

村上 和繁<sup>1</sup>・垣東 弘一<sup>2</sup>  
正木 幸子<sup>3</sup>・横山 宏<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 園田学園女子大学

<sup>2</sup> 園田学園女子大学短期大学部

<sup>3</sup> 大阪商業大学

<sup>4</sup> 大阪電気通信大学

## 1 はじめに

高度情報社会では、プレゼンテーション（以下、プレゼンと記す）能力が必要とされている<sup>[1]</sup>。これを受けて、従来から大学で行なわれている一般教育科目でのプレゼン教育の方法を見直す必要があると考える。これまで行なわれてきた教育方法の多くは、一般教育科目という制約の中で、受講生が自分で制作・発表・評価までを行なう「プレゼンの経験」という形が主流であった。そこでは、教員は多人数を同時に教育するために、どうしてもプレゼンの質を追求することに時間をかけることが難しいという状況があった。そして、制作されたプレゼンの質は、受講生の能力（知識やスキルや意識）に大きく依存し、初級レベルの教育（プレゼンの経験をさせるだけ）に留まざるを得なかったと言える。

筆者らは、こうしたプレゼン教育の質を高めるために、受講生らのリフレクション（自己省察）に着目した。プレゼンの質を高めるためには、受講生が制作したプレゼンを客観的に見直し、チェックし、気づき、判断し、修正するという過程を行なうリフレクションが不可欠で、そのためにはリフレクションのきっかけとなる「見直し」やチェックを意識させ、「気づき」を起こさせることが重要であると考えている。そこで、本来プレゼンには作る役割、演じる役割、評価する役割などの役割が存在することに着目し、これらの役割を受講生に意識させるために、自分と他者の関係を導入した。すなわち、3つの役割と「自分」と「他者」という関係から $2^3=8$ つのプレゼンのタイプを提案し、その教育への利用を考えた。そしてそのうち1つのタイプを組み込んだ「D-P方式」を実践してきた<sup>[2][3]</sup>。

本稿では、プレゼン教育の8つのタイプを説明し、それぞれの特徴をまとめる。また実践した「D-P方式」で得られた受講生らの気づきについて、報告する。

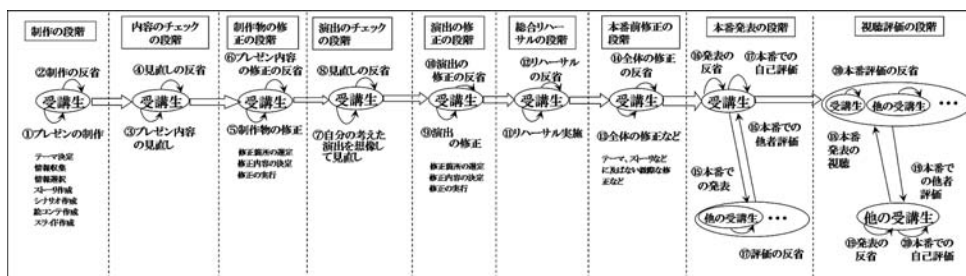
## 2 これまでのプレゼン教育

これまでも大学では、一般教育科目としてプレゼン教育が行なわれてきた。特別な機器や機材を利用するなどの工夫した教育をされてきた場合もあるが、こうした教育を大まかにまとめると、受講生本人にプレゼンを作らせ、リハーサルをさせ、演じさせ、評価させるといった流れで行なわれてきたと筆者らは考えている。筆者がまとめたプレゼン教育の流れを図1に示す。

図1はプレゼン教育の大まかな流れを示している。ただし、ここに示した段階は教育環境などに合わせて省略されたり、結合されたりする場合もあった。これまでのプレゼン教育では、受講生が自らテーマを決め、プレゼンの内容を制作し、リハーサルを行ない、本番発表をするという図1のような一連の流れを経験させ、それを通じて学習を成立させるという経験主義に基づいて、受講生のプレゼンに必要な能力を一括して育成しようとしてきた。受講生らは自分がプレゼンを提案し、それを自分で確認しながら制作、反省などの過程を行なっていく。そのため、受講生がプレゼンを十分経験し、「～～しながら、～～する」という能力が備わっており、例えば、演じている自分について客観視できるプレゼン上級者であれば、この方法は極めて一貫性があり、教育の方法として適すと筆者らは考えている。

また一般教育科目では、多人数を一斉に授業をする必要もあり、教員が一人あたりの指導に充てられる時間にも限りがあると考えられるが、この方法では、個人がプレゼンの過程を体験するため、時間的な制約も少なく、多人数一斉授業に向くと考えられる。これまでのプレゼン教育ではこのような利点があったと考えている。

しかし、プレゼンの質は受講生自身の能力にかかってくるため、受講生の能力が不足している場合や受講意図などによっては、制作し、発表することに意識が集中してしまい、制作されたプレゼンが十分に見直されない場合も見られた。そのほかにも、プレゼンを見直し、反省することは、プレゼンを評価することと深い関係があるため、自分の制作したプレゼンを客観的に評価できない初級者では、見直したとしても自己満足に終わってしまう場合もあり、初級のプレゼン教育の質という視点で考えた場合に、十分とは言えない可能性があると考えている。



矢印の意味：矢印の元から先に向かって情報が流れる。

図1 これまでのプレゼン教育の流れ

### 3 プレゼンでの役割

プレゼンには、本来、作業ごとに役割が存在すると筆者らは考えている。例えば、企画者、脚本家、制作者、演出家、演者などと言ったものである。プレゼン上級者への教育では、こうした役割をすべて意識させ、教育を行なう必要があると筆者らは考えている。しかし、初級者にはこのように高度に分業化された役割のすべてを意識し、プレゼンのチェックやリハーサルを行なっていくことは難しい。そこで筆者らは、これらを大きく3つの役割にまとめることにした。それは作る役割、演じる役割、評価する役割などである。作る役割には内容や資料を作る Writer 役 (W 役) と演技や演出を作る Director 役 (D 役)、演じる役割にはリハーサルや発表を行なう Presenter 役 (P 役)、評価する役割には Audience 役 (A 役) が含まれる。こうした役割を意識させることで、受講生に他者を意識させることができ、視聴者や評価者の意識で自分のプレゼンを見るきっかけになり、プレゼンの過程の随所で行なわれる反省すること、つまりリフレクションを助けることができるのではないかと考えた。

### 4 リフレクション

プレゼン初級者である受講生が制作したプレゼンを客観的に見直し、チェックし、気づき、判断し、修正するというリフレクションを行なわせる必要があると筆者らは考えている。そして、リフレクションを起こさせるためには、そのきっかけとなる「気づき」を起こさせることが重要であると考えている。

これまでも自らのプレゼンについて「気づき」を起こさせるために、リハーサルをビデオカメラで記録し、記録物を見せる方法や、コンピュータシステムを用いて受講生の気づきを促すなどの工夫もされてきた<sup>[4][5]</sup>。しかし、ビデオカメラを用いた場合でも、演じている自分から離れ、視聴者として客観的に自分を見るという客観視をする必要がある。プレゼンの上級者であれば、本番の段階の最中にリアルタイムに自分を評価し、その結果をフィードバックし、プレゼンを演じている最中に変更するといったような、客観視をしつつ、演じる能力や評価する能力を同時に発揮することも可能であろう。しかし、当然ながらこうしたことはプレゼンの経験を十分に積んでいない初級者には不可能だと考えられる。またコンピュータシステムを用いた場合でも、特別な機器や機材が人数分必要となり、多人数一斉授業の場には適さない。

またこれらの工夫では前述してきたプレゼンで役割を意識させる配慮がされていない。そのため、プレゼンを行なっている最中に他者を意識させて、リフレクションの元になる「気づき」を起こさせるプレゼン教育の工夫が必要となると考えた。

この工夫を考える上で、前述してきた3つの役割と「自分」と「他者」という考え方から、 $2^3 = 8$ 通りのプレゼンのタイプが生まれると考えている。この考え方はプレゼン教育を考える上で

のフレームワークとして利用できると筆者らは考えている。

## 5 プレゼンの8つのタイプとその教育への活用

プレゼンの8つのタイプを筆者らは、表1に示すように「自作自演自評価」～「他作他演他評価」などと呼ぶことにしている。表1に筆者らが考えるプレゼンのタイプをまとめて示す。

筆者らはこの表1を用いて、一般教育科目の場でプレゼン初級者に適した教育方法を考えることにした。なお、表1で示している他者は、自分以外の他者すべてを含む。他者を複数含むタイプでは、ある役割を担当している他者とその他の役割を担当している他者が同一人物とは限らない。

表1で、特に8番の「他作他演他評価」では、他者が制作し、他者が演じたものを、他者が評価する。例えば、授業中に、他者が制作し、他者が演じたプレゼンをビデオなどで鑑賞し、教員がプレゼンについて解説する場合などがこれにあたる。そこでは、「自分」はプレゼンとその評価を視聴することになる。

これらの8つのタイプを教育に用いた場合に受講生に発揮する能力を整理したものを表2に、それぞれのタイプを用いた教育方法が適応できる場や状況を整理したものを表3に示す。なお、表2は、それぞれのタイプで発揮させる能力とその過程を比較している。

1. 「自作自演自評価」のタイプを教育に用いた場合は、「自分」にプレゼンの過程すべてを一貫して経験させることができ、プレゼンにかかわる能力をすべて発揮させることができる。その

表1 プレゼンのタイプ

項目 タイプの名称	作る 主体	演じる 主体	評価する 主体	タイプの説明
1. 自作自演自評価	自分	自分	自分	自分が作った物を、自分で演じて、自分で評価するタイプ
2. 自作自演他評価	自分	自分	他者	自分が作った物を、自分で演じて、他者に評価してもらうタイプ
3. 自作他演自評価	自分	他者	自分	自分が作った物を、他者に演じてもらい、自分が評価するタイプ
4. 自作他演他評価	自分	他者	他者	自分が作った物を、他者に演じてもらい、他者に評価してもらうタイプ
5. 他作自演自評価	他者	自分	自分	他者が作った物を、自分が演じて、自分で評価するタイプ
6. 他作自演他評価	他者	自分	他者	他者が作った物を、自分が演じて、他者に評価してもらうタイプ
7. 他作他演自評価	他者	他者	自分	他者が作った物を、他者に演じてもらい、自分が評価するタイプ
8. 他作他演他評価	他者	他者	他者	他者が作った物を、他者に演じてもらい、他者に評価してもらうタイプ

表2 主体者としての「自分」が発揮する能力

能力 タイプ	制作の能力	制作の リフレクション	演じる能力	演じることの リフレクション	評価する 能力	評価の リフレクション
1. 自作自演自評価	○	△	○	△	○	△
2. 自作自演他評価	○	△	○	△	-	-
3. 自作他演自評価	○	◎	-	-	○	◎
4. 自作他演他評価	◎	○	-	-	-	-
5. 他作自演自評価	-	-	◎	○	○	△
6. 他作自演他評価	-	-	◎	○	-	-
7. 他作他演自評価	-	-	-	-	◎	○
8. 他作他演他評価	-	-	-	-	○	◎

印の意味：◎（特に発揮する）、○（発揮する）、△（限定的に発揮される）、-（発揮しない）

表3 8つのタイプを利用した教育の持つ特徴

状況や対象 タイプの名称	全体的な プレゼンの経験の 重視という配慮	特化した プレゼンの経験の 重視という配慮	多人数一斉授業 への配慮	初級者 への配慮	中・上級者 への配慮
1. 自作自演自評価	向く	工夫が必要	向く	工夫が必要	向く
2. 自作自演他評価	やや向く	工夫が必要	向かない	工夫が必要	工夫が必要
3. 自作他演自評価	工夫が必要	やや向く	工夫が必要	向く	やや向く
4. 自作他演他評価	工夫が必要	向く	向かない	やや向く	やや向く
5. 他作自演自評価	工夫が必要	やや向く	向く	やや向く	やや向く
6. 他作自演他評価	工夫が必要	向く	工夫が必要	やや向く	工夫が必要
7. 他作他演自評価	向かない	向く	向く	工夫が必要	やや向く
8. 他作他演他評価	向かない	向く	向く	やや向く	やや向く

ため、プレゼンの評価の視点やその基準などを十分に理解し、同時に複数の能力を発揮でき、客観視ができるプレゼン中級者や上級者にはもっとも適した方法であると言える。プレゼンを演じながら、演じている自分をリアルタイムに評価し、その評価をリアルタイムにフィードバックさせるといったプレゼンの教育にはこのタイプが最も適すだろうと考えている。しかし、この方法を一般教育科目で初級者に行なうには、工夫や十分な配慮のある指導が必要になる。

2. 「自作自演他評価」のタイプを用いた場合は、「自分」に作ることに集中させて能力を発揮させることができ、制作時や演じる時に気がつかなかった点を他者から指摘してもらうことができる。制作時や発表時に他者の目を意識させることになるため、初級者にも適した方法であろう。しかし、受講生同士で指摘させあうことには十分な配慮が必要なため、教員の指導が必要になる。その他にも、受講生同士でテーマが異なる場合は、評価する側の知識の不足などから、演技などの表面的なことの指摘に留まってしまう可能性がある。そのため、内容につい

での指摘は教員などの指導者が行なう必要がある。この方法はゼミなどの少人数教育に適するが、多人数一斉授業には適さないとと言える。

3. 「自作他演自評価」のタイプを用いた場合は、「自分」に制作することと評価することに集中させて、能力を発揮させることができる。演じる段階に他者が介在するために、他者の目を意識させることになる。しかし、演じることを経験させることができないために、この点を工夫しなければ、初級者には適さないと考えている。また、制作したものを他者に演じてもらい、「自分」の制作したものを忠実に再現してもらう方法であるため、演じる役割の他者とのコミュニケーションが重要となり、この点に注意する必要がある。

4. 「自作他演他評価」のタイプを用いた場合は、「自分」に制作することに集中させて能力を発揮させることができる。しかし、演じることと評価することを経験させないため、プレゼン初級者には適応しにくいと考えている。上級者にとっては、制作という点に特化した教育になると考えられるが、この場合は評価者にも相応の評価能力が要求されると考えられる。またこの方法でもプレゼンの内容にかかわる指摘は、教員など指導者が行なう必要があると考えられる。そのため、多人数一斉授業には適さない。

5. 「他作自演自評価」のタイプを用いた場合には、「自分」に演じることと評価することに集中させて能力を発揮させることができる。特に「他者」の指示や指導に忠実に演じることができたかといった基準で、分かりやすく「自分」を評価できるため、初級者の演じる練習に適すると考えられる。上級者にとっても、演じることに特化した教育をする場合に適するのではないかと考えている。

6. 「他作自演他評価」のタイプを用いた場合、「自分」に演じることに集中させて能力を発揮させることができる。その内容に関する知識が不足していても演じることについては、十分に指摘やアドバイスができる。そのため、演じることに限れば、初級者の教育や多人数一斉授業にも適すると考える。ただし、受講生同士で指摘させ合う場合には十分に注意が必要であることになり、教員は十分な注意が必要であろう。

7. 「他作他演自評価」のタイプを用いた場合、「自分」に評価することに集中して能力を発揮することができる。評価基準や評価項目が分かっていない受講生には、十分に評価基準や評価視点など、望ましい、望ましくないといった判断基準を指導する必要があるだろう。それが十分に行なわれていない場合には、評価したことが受講生の自己満足に終わってしまう可能性がある。こうしたこともあるが、初級者と上級者ともに評価の能力に特化した教育に適すると言える。

8. 「他作他演他評価」のタイプを用いた場合、「自分」は「他者」が行なった評価から「自分」が持っていなかった視点や基準に気づくことになる。そこで得た視点から、「自分」が過去に行なった評価を振り返って、見直すといったことが可能と考えられる。そのため、初級者にプレゼンの評価の視点やその基準など、評価についての教育をすることに適するものと考えられる。また、上級者にとっても、気づいていない新たな視点を得るために有効な教育方法であると考えられる。教員が講義形式に近い形で説明をすると想定すると、多人数一斉授業にも適応が可能であ

ろう。

これらのタイプの中で、筆者らはリフレクションを強化する教育方法として3.「自作他演自評価」を取り上げ、多人数一斉授業のための工夫を加えて、実践を行なった。

## 6 「D-P 方式」

筆者らは、プレゼン教育方式として「D-P 方式」を提案してきた。この方法のコンセプトは次の4つである。なお、「D-P 方式」でのDとPはそれぞれ、3章のプレゼンでの役割で記述した制作者（Director 役）、発表者（Presenter 役）である。

- ・ 役割意識
- ・ ペアリング
- ・ 指示とその確認
- ・ 「自作他演自評価」でのリハーサル（これを代行リハーサルと名づけている。）

3. 「自作他演自評価」のタイプは、リフレクション能力の発揮には適しているが、表3に示したように多人数一斉授業で行なうためには実践のための工夫が必要である。その工夫として筆者らは受講生にペアを組ませ、相互に役割を交代するペアリングというコンセプトを導入した。ペアリングを行なわせ、役割交代させることで、交互に代行リハーサルを経験することができ、限定的ながら演じることも経験できる。

またD役の制作したプレゼンをP役がD役の考えに忠実に演じることを目指すため、その両者の役割間でのコミュニケーションがキーとなる。そのため、D役には指示をする内容を事前に指示書という形にまとめさせ、それを使って指示をさせている。指示書を作成することでも、D役のプレゼン内容や指示内容が外化され、チェックができ、気づき、改善案を考え、修正するというリフレクションが可能であると考えている。

こうしてD役とP役の役割間でのコミュニケーションがキーとなり、かつ、それらの役割が共同して学習をすすめていくことから、D-P方式と名づけた。

### 6.1 「D-P 方式」の手順

本方式の流れを図2に示す。

図2から、まず自分（制作者、D役）はプレゼンの制作とその反省を行なう（図2. ①、②）。次に、制作したプレゼンの内容や演技方を指示書に書き起こし、その反省をする（図2. ③、④）。そして、実際に指示をして（図2. ⑤）、プレゼンの内容の見直しを行ない、他者（リハP役）から指示の確認を受ける（図2. ⑤' ⑥）。その後、指示について反省をする（図2. ⑦）。指示し、その確認内容と指示内容、また指示書に自分のプレゼンを外化することで、気づく一連の過程を第1段階のリフレクションと呼んでいる。プレゼンの内容を修正し、修正の反省

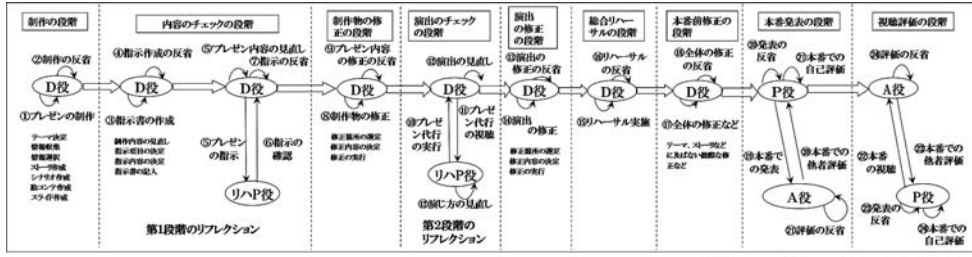


図2 提案する指導方法の順序

を行なう（図2. ⑧、⑨）。こうした準備を行なってから、代行リハーサルを行なってもらい、視聴し、見直しを行なう（図2. ⑩～⑫）。この代行リハーサルで起きるリフレクションを第2段階のリフレクションと呼ぶ。そして代行リハーサルで気づいたプレゼンの内容や演技の問題点を判断し、修正する（図2. ⑬、⑭）。次に1. 「自作自演自評価」によるリハーサルを総合リハーサルとして行ない、反省する（図2. ⑮、⑯）。そして、最終の修正として全体の修正とその反省を行なう（図2. ⑰、⑱）。そして本番の発表として1. 「自作自演自評価」によるプレゼンを行ない、自己評価や他者評価を経て、反省を行なう（図2. ⑲～⑳）。次に他の受講生のプレゼンを視聴し、評価を行ない、その反省をする（図2. ㉑～㉒）。

## 6.2 実践とそこで得られたデータ

2007～2010年度後期にOC大学で一般教育科目「マルチメディア基礎」として実践してきた。ここでは、受講生は自由にテーマを設定させ、パワーポイントを利用してスライドを制作させた。この実践から、特に代行リハーサル後の受講生の気づきについてデータを採取した2009、2010年度について取り上げる。

2009年度の実践では代行リハーサルを実施できた受講生は16名で、2010年度の実践では26名であった。なお、代行リハーサルを行なう授業回までに指示書が完成しなかった受講生は「自作自演自評価」のタイプのリハーサルを行なっている。

これらの受講生に代行リハーサル直後に気づきが起こった点をあらかじめ用意させたスライドの印刷物に丸印と通し番号を入れさせ、その内容と理由や気づきの元をリハーサルでの気づきをチェックするシート（以下、記入シートと記す。）の通し番号に対応する記入欄に記入させた。得られた気づきのデータを気づきの対象を視点としてテーマ、ストーリー、スライド、セリフ、その他の5つの項目に分類した。

記入シートの記入例を図3に、気づきを分類したものの集計を表4に示す。

表4を見ると、2009年度の実践では、スライドについての気づきが13件（41.9%）ともっとも多く、テーマについての気づきをもっとも少なく2件（6.5%）であった。気づきの総数は31件で一人当たり1.9件の気づきがあった。2010年度の実践ではスライドについての気づきが22件（43.1%）ともっとも多く、ストーリーについての気づきをもっとも少なく3件（5.9%）であっ



学 年	学 科	学 期	学 号	番 号	氏 名	姓 名
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

リハーサルチェックシート

質問① チェックした箇所について、何に気づきましたか？（気づいた内容はなにかな）  
質問② チェックした箇所は、何を基準にして気づきましたか？（なぜ気づいたか）

記入例

(1) ① 東大阪だけでなく正確ではないと気づいた。  
② 聞いている人が、東大阪のどこなのかわからないと思うと考えたから

(2) ① 学級科目の数だけしか用いていないことに気づいた。  
② 学校紹介のパンフレットを思い出し、そこには名前まで載っていたことから

記入欄

(1) ① 人物が話している場面は、3分程度は、  
② 4分過ぎると、この人物について、PPTの資料を戻さないと、聞き手が飽きる  
③ 4分過ぎると、この人物について、PPTの資料を戻さないと、聞き手が飽きる

(2) ①  
②

図3 記入シートの記入例

表4 気づきの対象の集計

分類名	2009年	率	2010年	率
テーマ	2	6.5%	6	11.8%
ストーリー	6	19.4%	3	5.9%
スライド	13	41.9%	22	43.1%
セリフ	5	16.1%	20	39.2%
その他	5	16.1%	0	0.0%
合計	31	100.0%	66	100.0%

複数回答可

た。気づきの総数は66件で一人当たり2.5件あった。

## 7 現時点での結論

本稿では、プレゼン教育に役割というコンセプトを導入して「自作自演自評価」～「他作他演他評価」の8つのプレゼンのタイプの特徴をまとめた。そして、リフレクション能力を発揮させ、かつ、初級者への教育に適応すると考えられる3.「自作他演自評価」のタイプに多人数一斉授業に適応させるためのペアリングという工夫を加えた授業実践を行なった。

実践の結果、「自作他演自評価」のタイプでは、初級者である受講生にも気づきが生じていた。特に客観的に自分のプレゼンを見ることができないと気づきにくいと考えられるテーマやストーリーについての気づきも起きていた。これは筆者らのねらい通りに初級者である受講生に役割を意識させ、他者を意識させたことと、見直しや評価に集中させ、自らのプレゼンを客観的に見ることができたからであると考えている。また、この方法が受講生にも受け入れられることが確認されている<sup>[6]</sup>。3.「自作他演自評価」のタイプについては、表3に沿った結果となったと言える。

## 8 おわりに

本稿で提案したプレゼン教育の8つのタイプは、今後、初級者だけでなく、中・上級者も含めたプレゼン教育を考えていくためのフレームワークになると期待している。これまでに行なった授業実践は、「自作他演自評価」のタイプ（D-P方式）で、初級者に限定したものであった。さらに研究を進め、それぞれのタイプごとの実践における工夫を提案していきたいと考えている。

またD-P方式での気づきについても、記述シートを用いた方法では、代行リハーサルを行なった時点での気づきを調査するのみで、リハーサル後に考えて気づいたものについては、調査で

きていない。今後はこの点についてもデータを採取する機会を増やすなどして、確認していきたいと考えている。

本研究は平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「情報社会における表現力を育成する役割別能力育成・リフレクション方式の研究」、課題番号 21500917）を受けて行なったものである。

#### 参考文献

- [1] 経済産業省：“社会人基礎力に関する研究会-「中間とりまとめ」-”，（2006）
- [2] 村上和繁ら：“リフレクションを意識させたプレゼンテーション教育の手法 -D-P 方式のワークショップの反応から-”，2011 年度情報コミュニケーション学会第 7 回研究報告，pp.46-51（2011）
- [3] 村上和繁ら：“D-P 方式によるプレゼンテーション教育方法”，情報コミュニケーション学会誌 Vol.5, No.1 & 2, pp.16-21（2009）
- [4] 瀬田和久ら：“問題解決指向型学習におけるリフレクション支援システム”，教育システム情報学会研究報告 Vol.20, No.3, pp.11-16（2005）
- [5] 宮脇剛志ら：“プレゼンテーション・リハーサルレビュー支援システムの構築 -レビュー結果の視覚的揭示によるプレゼンテーション改善支援-”，電子情報通信学会信学技報，Vol.108, No.470, pp.59-64（2009）
- [6] 村上和繁ら：“D-P 方式によるプレゼンテーション教育 -リハーサルでの指示役と指示受役のコミュニケーションについて-”，第 6 回情報コミュニケーション学会講演論文集，pp.32-33（2009）

---

[むらかみ かずしげ 情報教育]  
[かきとう ひろかず 教育工学]  
[まさき さちこ 情報教育]  
[よこやま ひろし 教育工学]